研究成果の公開──最近開催されたシンポジウム等から

国際シンポジウム

「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り──あの世とこの世をめぐる儀礼」

日時：2017年3月4日（土）～5日（日）
場所：国立民族学博物館
企画：横山廣子

東アジア地域に広く見られる７月の死者儀礼は、日本ではお盆として全国的に行われており、最も身近な宗教行事の１つである。アジア地域に広がる同様の儀礼を見渡すと、起源やその内容に関して軌を一にし、類似する側面もあるが、各地で独自の展開もある。各地の活動には、祖先祭祀や無縁の死者の供養といった宗教儀礼以外に、盆踊りやさまざまな芸能活動としての展開など、多様な内容が見られる。

本シンポジウムは、この７月の儀礼を朝鮮半島、日本、中国本土、台湾、香港、ベトナムと東南アジア華僑・華人地域を視野に入れて比較検討することで、それぞれを位置づけ、その歴史、当該社会とかかわる個々の展開の状況、現在まで継続されている意味などについて考察した。数十年あるいは数世紀遡る歴史的視点と東アジア各地の事例を集積することにより、この儀礼の多様なあり方が国家や地域、方言集団などの個別の歴史やアイデンティティのあり方を反映していることが明らかになった。他方、東アジアを広く概観することにより、個別の状況への理解を深めることができる可能性が明らかになった。

一般講演会

「人間と食との関係をとらえなおす」

日時：2017年3月5日（日）
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館基幹研究プロジェクト民博ユニット「文明社会における食の布置」

この講演会は、人間文化研究機構の基幹研究プロジェクトの民博ユニット「文明社会における食の布置」の成果発信であるとともに、これから民博で進めようとしている、食と文明をテーマにした特別研究のキックオフ的な意味をこめて開催した。このプロジェクトの狙いは、「伝統食」の紹介にとどまりがちな食文化の研究を越えて、文明論的な視点で食の課題を考えていくことにある。ただし、そのためにも具体的な事例から積み上げていく姿勢は必要である。

今回の講演会では、河合（民博）の「広東は本当に何でも食べられるのか」では、何でも食べられるというイメージが付与されてきた広東人のなかで、食の選択が特有の健康観のもとで行われているということが指摘され、宇田川（民博）の「イタリアの『地産地消』」では、地域性と結びつけられた食のもつ肯定的なイメージがナショナリズムやグローバル化という観点から批判的に検討された。野林（民博）は、食と健康との関係のとらえかたが、世界の各地域や社会によって異なることを人類進化史の視点もとりこみながら解説するとともに、

文明社会がつくりあげた健康観が地域の食や日常の食生活を変質させてきたことを解説した。

特別研究プレシンポジウム

「歴史生態学から見た人と生き物の関係」

日時：2017年3月26日（日）
場所：国立民族学博物館
企画：池谷和信

本シンポジウムは特別研究「生物・文化的多様性の歴史生態学」のプレシンポジウムであり、その目的は、先史から現在までの人間・環境関係に関して、歴史生態学的アプローチを軸にして議論していこうとするものであった。とくに動物・植物の利用や絶滅、保護の変遷、およびそこで生じている諸問題を把握することを通して、現代文明と環境との関係を考えることにした。その結果、以下のような点が明らかになった。

まず、生態史、環境史、エコ･ヒストリーなどの用語について、英語圏で使用される歴史生態学との本質的な違いがあることが浮かび上がった。個別事例に関しては、ジャガイモ、タロイモ、バナナなどの植物、クジラ、ラッコ、鵜、ゾウ、ダチョウ、キツネなどの動物が選ばれ、それぞれの実態が詳しく報告された。また、野生種の栽培化や家畜化の過程や動機をはじめ、在来ジャガイモのように現代の文明のなかでの稀少種の保護などについても活発な議論が行われた。現在、文明の力はますます強くなっていて地域の文化を維持することが難しくなっている。今後、現代の地球のなかでの自然、文化、文明が共存する新たな形を模索していく必要があると考えている。